

玉 際

長崎大学大学院 国際協力健康開発研究科 2008年4月 新設

国際協力の現場で活躍するプロフェッショナルを養成

国際協力の現場で活躍するプロフェッショナルを養成

世界には、貧困、環境破壊、紛争などを背景に、適切な保健や医療のサービスを受けられないまま多くの人々の生命や健康が失われている国や地域があります。長崎大学大学院国際健康開発研究科は、このような国際的な健康問題の解決に向けて取り組む専門的な人材を育成するために生まれました。日本で初めての試みといわれる本研究科の特色をご紹介します。



研究科長 青木 克己 教授
Aoki Yoshiki

長崎大学熱帯医学研究所教授、同研究所所長、21世紀COEプログラム「熱帯病・新興感染症の地球規模制御戦略拠点」リーダーなどを経て現職。海外学術研究では、中米グアテマラでのオンコセルカ症の疫学対策研究の他、'81年から現在までケニアにおける住血吸虫症の疫学対策研究に従事。99年小泉賞(日本寄生虫学会)受賞。'02年大山健康財団賞(大山健康財団)受賞。

国際協力の現場で活躍できる

「公衆衛生学修士」を育成します。

世界では、貧しい国々を中心にエイズやマalariaなどの感染症がまん延したり、多くの子どもたちが予防できる病気で亡くなったり、母親が妊娠、出産時に十分なケアを受けられずに亡くなるなどしています。近年、日本ではこのような問題に関心を持つ若者が増え、海外ボランティアをめざす人も少なくありません。ところが、残念ながらその現場では体系的な知識と実践能力を有するプロフェッショナルな人材が不足しています。長崎大学大学院国際健康開発研究科(修士課程2年)は、そのような現場で活躍できる人材として、公衆衛生学修士

(MPH: Master of Public Health)を育成するために設立しました。これまで、日本では地球規模課題である健康問題を考える国際保健分野の人材育成は立ち遅れており、本研究科はその専門的人材を系統的に教育する日本で初めての機関として、国際協力関連機関や団体などから大いに注目され、期待が寄せられています。初年度となる今年は11人の学生を迎えました。近い将来、国際協力の舞台で活躍するために、猛勉強の日々をおくっています。

途上国において、母子の健康問題を扱う母子保健の向上は重要なテーマのひとつだ。教育を受けた母親の子どもは生存率がいいと言われ、母親の知識や意識の向上などが課題とされる。



いろいろな分野の知識を得て、複眼的な思考を育みます。

本研究科のベースにあるのは、長崎大学が熱帯医学研究所、医歯薬学総合研究科などを中心に長年取り組んできた熱帯医学分野の研究と人材育成の経験です。海外における研究実績も豊富で、本研究科では、それを活かしながら人材を育てていきます。本研究科の教育の大きな特長のひとつが、セクターを越えた学際的なアプローチです。熱帯公衆衛生学を基礎としながらも、さらに人類学、国際経済学、社会学、行動科学など、多様で幅広い分野の知識を習得します。

ところで、なぜ、いろいろな分野の知識が必要かという点、国際的な健康問題を取り巻く状況はたいへん複雑で一筋縄では解決できないからです。たとえば健康問題を抱える途上国に、いきなりワクチンや薬などを持ち込んでも、文化や社会的背景の違いから住民に拒否されたり、それに必要な環境が整っていないために使用できない場合もあります。相手にとって最適な手段や方法を見つげるために、国際情勢、政治、経済、社会、文化などを理解できる力と複眼的な思考を養う必要があるのです。



砂を掘って地下から飲料水を得るエチオピア南部の農牧民パナの人々。実はこの近くに海外の援助団体が設けた井戸があるが、メンテナンスが不十分なまま放置されている。彼らはその井戸の水を「まずい」といって飲もうとしない。真の援助とは何だろう。



99年、大干ばつに見舞われ、海外からの援助穀物の分配を待つエチオピア南部の人々の行列。しかし、配られた小麦は、彼らにとって食べたことのない見知らぬ穀物だったため、その多くが市場に転売されたという。援助が外の外れではどうしようもない。

海外での長期インターンシップで、実践能力を養います。

本研究科の教育のもうひとつの大きな特長が、海外の現場を体験できるカリキュラムです。第1年次の夏には、それまでに学んだ基礎知識を実践の場で活かすことを目的とした1カ月間の短期フィールド研修。第2年次には現場における問題解決能力を育成するために、学生の専門に合った現場で8カ月の長期インターンシップが行われます。それぞれの現場では、さまざまな立場の人々と渡り合うコミュニケーション能力や、それぞれの能力を上手く活かしながら、政策を立て、実施して行くマネジメント能力、調整能力などを養っていきます。これらの現

場研修は、長崎大学の海外拠点、ケニア、フィジーなどの他、JICAやNGO、国連、国際協力関連コンサルタント会社などと連携して実施されます。日本で初めての試みとなつた本研究科の設立は、学部を越えて新しい分野にチャレンジする新時代の大学の教育研究の在り方を示すものでもあり、他への波及も期待されています。この新しい体制から世界へはばたくことになる本研究科の学生たち。刺激的で充実したこの2年間が、彼らの将来の大切な礎になるのは間違いありません。

エチオピアの地方都市では、この10年間で、電灯や水道などのインフラ整備がかなり進んだ。この町でも昨年、水道供給がはじまった。水汲みは子どもたちの仕事で、以前は少し離れた場所まで歩いて井戸水を汲みに行っていた。



イラクでの緊急医療援助の様子。緊急援助の場合、むずかしい判断を迫られることもあり、国際協力の理想と現実のギャップを感じたり、現場の人々から学ぶべきことが多いことに、あらためて気づかされる。そして、時にはUn-learning、学び捨てることも必要に。



ピースウィンズ・ジャパン提供

Graduate School of International Health Development

長崎大学大学院国際健康開発研究科(修士課程)の概略



履修プロセス

学んで、体験して、自分のものにする。
知識と実践力をバランスよく有する人材を育成します。

- 第1年次前期では、特論基礎科目を通じて、途上国の現場で国際保健プロジェクトを実施運営するための専門家として必要な基礎知識を習得します。
- 第1年次の夏休み期間に、基礎知識の実践的重要性を体験するために、短期フィールド研修(1カ月)を実施します。
- 第1年次後期には、特論応用科目を通じて、国際保健学分野の専門家に必要な専門知識を学びます。
- 第2年次では、実践的問題解決能力の育成のために、学生の専門に合わせた現場で長期インターンシップを実施。この時、課題研究報告書または修士論文に必要なデータや情報も収集します。
- 第1年次から第2年次の2年間を通じて「国際保健学演習」の研究指導を実施。課題研究報告書の発表、審査が行われます。



1年次は座学が中心。基礎知識を徹底的に身につける。



2年次の長期インターンシップで現場での実践能力が磨かれる。(写真は研修先のひとつツェニア)

応援メッセージ

健康を考えること

池上 清子

国連人口基金
(United Nations
Population Fund)
東京事務所長



健康とは、

単に心と体が病気でないことを指すもの

ではない。公衆衛生的

な観点や予防医学的なアプローチももちろんであるが、実は、現代的な意味合いとしては、開発とのリンク、つまり貧富の格差是正などの社会的な視点を見逃すわけにはいかない。

国際社会がミレニアム開発目標(MDGs)を、国際社会の一致したコミットメントとして、国連総会で採択したのは2000年である。8つの開発目標を設定し、2015年までに達成すべき数値目標も定め、人権を守ることを開発の成果を求めることを基本線に据えた。これは、1990年代の国際会議やサミットで決まった国際開発目標を統合したもので、現在では、開発に関する国際社会の共通した枠組みとなっている。

例えばこのミレニアム開発目標の中で、1994年の国際人口開発会議の成果は、ジェンダーの平等(目標3)、母子保健(目標4と5)、HIV/エイズなどの感染症対策(目標6)、環境の持続可能性の確保(目標7)としてまとまっております。8つのうち3つが保健分野の目標であ

ミレニアム開発目標(MDGs)

- 目標1 極度の貧困と飢餓の撲滅
- 目標2 初等教育の完全普及の達成
- 目標3 ジェンダー平等推進と女性の地位向上
- 目標4 乳幼児死亡率の削減
- 目標5 妊産婦の健康の改善
- 目標6 HIV/エイズ、マラリア、その他の疾病のまん延の防止
- 目標7 環境の持続可能性確保
- 目標8 開発のためのグローバルなパートナーシップの推進

(外務省ホームページ「ミレニアム開発目標(Millennium Development Goals:MDGs)」より抜粋)



る。経済・社会開発を進めていくうえで、人々や家族の健康がいかに重要であるかを示している。国際的な視点、しかも、開発と健康とのリンクを考え、学ぶことは、こ

れからのグローバルな社会において、日本人として、また地球人として貢献するために求められている資質ともいえよう。長崎大学の国際健康開発研究科は、そのための知識と経験を蓄積する場を若い人たちに提供してくれるものと期待している。

今年がMDGs目標達成までのちょうど中間年である。9月には国連総会で今までの成果が検証され、2015年までに私たちが何をすべきかが再度問われることになる。



国際健康開発研究科の新入生たち 人類への愛とフロンティア精神が原動力

吉岡 浩太さん



中米コスタリカで村落開発普及員を経て、グアテマラでJICAが実施しているアメリカ大陸特有の感染症、「シャーガス病」の対策プロジェクトに関わったのを機に、途上国の保健行政全般に興味を持ち、研究科へ入学しました。ここでは常に現実で活かせる学問をしていくというスタンスが気に入っています。グアテマラでは子どもの頃、内戦のため勉強できない境遇にあった現地の職員が、大人になった今も仕事の合間に少しでも学ぼうとする姿を見て心を打たれました。私は、勉強できるこの機会を大切にしなければと思っています。

東芦谷 梓さん



助産師として2年間働いた後、この研究科へ入学しました。もともと国際協力に興味があり、琉球大学国際保健研究会に所属し、いつか助産師として携わりたいと思っていました。現在、熱意ある先生方や途上国などでの国際協力の経験が豊かな同級生たちに囲まれ、毎日、刺激を受けながらいろんなことを吸収しています。私もそうでしたが、国際協力の現場での経験がないからと、入学を躊躇している人がいるかも知れません。でも、思いきってチャレンジすることをお勧めします。

宮本 奈穂子さん



私は、社会福祉士としてフィジーの養護学校で協力隊の経験があり、そこで保健医療支援の重要性を実感し、きちんとその分野の勉強をして国際協力の現場で働きたいと強く思うようになりました。大学が文系だったので、医師や看護師といった医療のバックグラウンドを持つ同級生より、勉強は確かにたいへんですが頑張りたい。この研究科では医療に限らず、広い体系で学べるのが魅力です。今は、自分のやりたいことをやれて、とても充実しています。



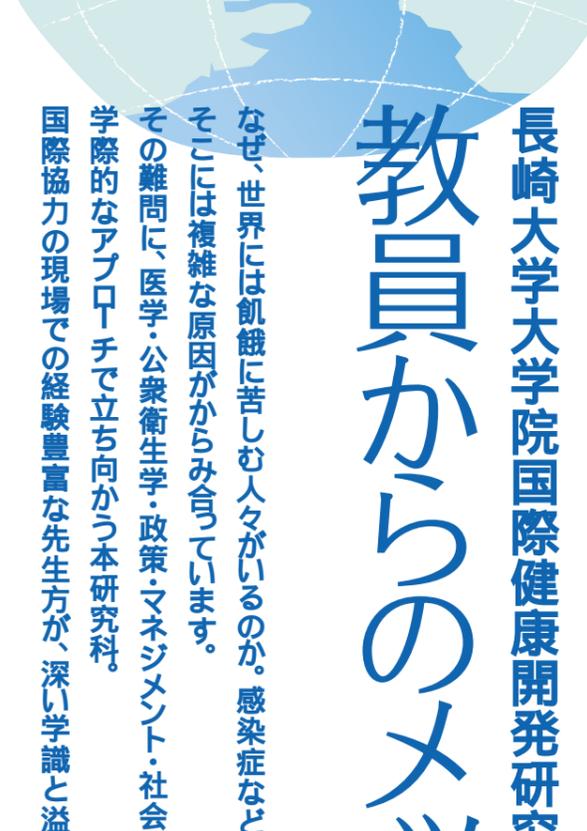
Kudo Takeshi
工藤 健准教授

担当科目:国際開発の経済学(マクロ経済)



Kaneko Satoshi
金子 聡教授

担当科目:サーベイランス・システム論



Kurosaki Nobuko
黒崎 伸子 非常勤講師

国境なき医師団 ボランティア医師(外科医)、日本BPW 連合会会長
担当科目:緊急医療援助論



Masuda Ken
増田 研准教授

担当科目:文化・医療人類学、国際保健学演習

長崎大学大学院国際健康開発研究科 教員からのメッセージ

なぜ、世界には飢餓に苦しむ人々がいるのか。感染症などの病気がなくなるのか。そこには複雑な原因がからみ合っています。その難問に、医学・公衆衛生学・政策・マネジメント・社会学・経済学など、学際的なアプローチで立ち向かう本研究科。国際協力の現場での経験豊富な先生方が、深い学識と溢れる熱意で、学生たちを鍛え上げます。

■途上国における貧困削減は、地球規模の課題となっており、感染症などの健康問題とも深く関わっています。また、その国の貧困削減には、経済成長が必要条件(ただし、十分条件ではありません)となることから、過去の経験から知られています。

私が担当する「国際開発の経済学Ⅰ」では、貧困削減の前提条件となる経済成長の仕組みを解明して、必要とされる経済開発の政策を国際的な視点から考えます。

また、途上国では、そのような政策に必要な資金が不足しがちなため、外国に借りたり、援助をあおぐ必要が出てきます。その際に生じる為替レートの変動や通貨危機がもたらす課題についても考えていきます。そのうえで、人々が豊かさを手にする条件を探っていきます。

■途上国の現場では、実践かつマネジメントのできる人材が求められています。本研究科は、そのような人材を育てることを目的としており、日本で初めての国際保健に特化した修士号の取得可能な研究科です。これから、どのように成熟していくのかは、この春入学した第一期生をはじめ、今後入学し、修了していく学生たちの双肩にかかっています。日本におけるこの分野の開拓者であることを自覚し、文化づくりと次の世代に伝えるための知識と経験の体系化を念頭にがんばってください。歴史は、本研究科の修了生によって作られます。

講義は、継続的情報収集(サーベイランス)論を中心に展開します。途上地域の健康状態を把握し、根拠(エビデンス)に基づく健康対策が必要です。ケニアで待っています。



工藤先生が論文(共著)を寄せた欧米の論文集。日本の金融政策や途上国に大きな影響を与えたとされるアメリカの経済の動向などについて書かれている。



長崎大学の海外研究拠点のひとつケニアのプロジェクティアリア内の子どもたち。女の子は毎日朝夕湖まで水を汲みに行く。男の子は牛追いが仕事。みんなケニアの空のように明るい笑顔が絶えない。



ピースウィンズ・ジャパン提供



■2001年から「国境なき医師団(MSF)」で外科医として活動してきた経験から、緊急医療援助概論の一部を担当し、現場での体験をもとに講義します。

紛争・貧困・自然災害に起因する人々の苦悩、そして、医療へアクセスできない人々への援助は短期では解決できず、広い医学知識以外に、社会情勢・文化・宗教への理解、異文化への適応力などが要求されるために、援助チームを支えるさまざまな人材が必要です。

この1カ月、外科医としてソマリアに滞在し、紛争が激しい日には銃創患者が数十人搬送され手術したり、緊急帝王切開など多忙な日々でした。残念ながら最後は治安悪化で緊急撤退しましたが、私が手術をした少年が空港に現れたのには驚くとともに大感激でした。(写真上)



緊急医療援助で出向いたソマリアでの手術室の様子。黒崎先生は、国境なき医師団のメンバーとして、スリランカ、イラク、インドネシア、リベリア、ナイジェリアなどへの派遣歴を持つ。

■健康開発は教育と並んで、社会開発の中でも中心的な役割を果たす部分です。その究極の目標は、その土地の人々が違和感なく幸福を感じられるようになることでしょう。大事なことは、誰が、どのような問題を感じているかです。学校教育が普及することを喜ぶ人、新しい価値観が入り込んでくるのを苦々しく思う人、だっています。

私はエチオピア南部の少数民族社会で、まさに現在進行中の近代化プロセスを研究していますが、国家規模の経済発展や辺境地域の開発事業が、在来の生活文化に変化をもたらす、人々のあいだにさまざまな葛藤を生み出していくのを目の当たりにしてきました。

一人ひとりが違和感なく幸福を感じられるにはどうしたらいいのか。その問題を一緒に考えてみたいのです。



世界には多様な生活文化や価値観がある。家畜の胃の中身を取り出して全身に塗る老婆。エチオピアのこの民族にとって、それは薬で、豊穡のしるしとされている。